

ワルシャワ大学コタンスキ教授の講義から

文学部教授 下 出 積 與

明治大学の外国人研究者招請の第一回に、夙にヨーロッパにおける日本学研究者としての令名高いワルシャワ大学ヴィエフワフ・コタンスキ教授を迎えることのできたのを喜ぶとともに、招請を実現された国際交流委員会の各位、ならびに西洋史学に直接の関わりがないにもかかわらず昨年春以来苦勞された文学部西洋史主任教授阪東宏氏の御努力に深く感謝する。と同時に、68歳の老軀でありながら、学問のためならばとポーランドが伝えられる如き困難な状況下にあるにもかかわらず来日されたコタンスキ教授に、衷心からの敬意を表したい。

コタンスキ教授は、来日早々の昭和58年12月16日、学部学生（文学部日本文学専攻・日本史専攻が中心）を対象に、「文学作品としての古事記」のテーマで講義をされた。ポーランドを中心にヨーロッパにおける研究状況の話であったが、古事記の用語を言語学的に研究する場合、使用されている漢字を単に仮名に分解するのではなく個々の音の母音と子音を分析し、その前後への結びつきは従来の仮名にとられるべきでないというところに主眼がおかれていた。したがって教授の解釈による用語の意味論は学生全般を啓発するとともに、学生とくに史学専攻の学生にとっては新知見として教示されたにとどまらず、かなりのとまどいと衝撃をも受けたことと思う。

第二回は新春1月13日、大学院生（日本文学専攻・史学専攻日本史専修）を対象に、「古事記における神名への新しいアプローチ」のテーマでの講義である。教授は、松村武雄氏に代表される比較神話学・言語学的見地による神名の解釈を、一応、日本の学界の通説としたうえでその再検討が行われた。神名についての教授の言語学的解釈については、言語学の素養に乏しいわたくしには意見を述べる限りではないが、ただ、通説による神名解釈は生成を

生起する力を考えていないか考えていても非常に稀薄であるという指摘、また、大地は物を生ずる働きをもつという意味は、ある物が地中にはいると全く別のものに生れ変るという意味を基調にして考えねばならないとする指摘は、日本の学者も大いに考え直さねばならない点と受けとるべきであろう。

第三回目は「古事記における宗教的・世俗的な偽装表現」と題して、明治大学の研究者を対象に1月27日に行われた。各学部の研究者のみならず、折から来日中のコペンハーゲン大学リディーン教授（ヨーロッパ日本学研究会々長）・フランス国立パリ高等研究院ロットモンド教授（同上副会長）も参加され、前後四時間にわたって活発な論義が交わされる盛況をみた。わたくしにとっては、多神教の世界の産物である『古事記』を研究する学者としてのコタンスキ教授も、基本的にはキリスト教神学の一神教的思惟による価値判断が結局は根底に捉えられていて、すべての考察がそこから発していることを再確認し得たことが、最大の収穫であった。

「古事記」における宗教的や世俗的な偽装表現

経営学部教授 大久間 喜一郎

1. 神名・人名を単語の集積体とみて、それらの持つ意味を割り出している。分割して単語からはみ出した音節にはH音や母韻を加えて新たな単語を作りあげ、何らかの意味を与えて、全体に適応させようとしている。

（評）右は結果論的な言い方になってしまいましたが、ウマシアシカビヒコヂの神などはその一例でしょう。本居宣長などもこれに近いやり方を数多くやっています。例えば、須賀之八耳神（八俣の大蛇の段に出てくる櫛名田比売の父）について、八耳神の意味は^{ヤツミコノ}巖都美々か？とする類いです。反切法を使っているのです。